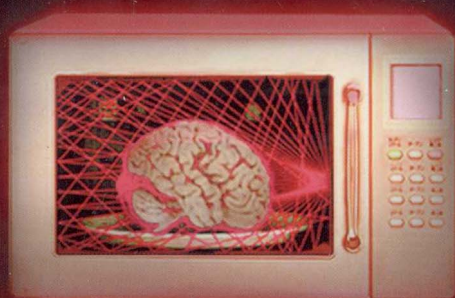


takeharu sakurai

櫻井武晴

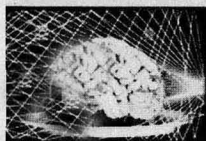
シグナル



kaharu sakurai

櫻井武晴

シガナル



徳間書店

シグナル ルシグナ ナルシグ グナルシ

著者 櫻井武晴

2001年 7 月31日 初刷

発行者 松下武義

発行所 株式会社徳間書店

〒105-8055 東京都港区東新橋 1 - 1 - 16

電話 03-3573-0111 (大代表)

振替 00140-0-44392

本文印刷 本郷印刷(株)

付物印刷 真生印刷(株)

製本 大口製本印刷(株)

© Takeharu Sakurai 2001 Printed in Japan

乱丁・落丁はお取替えいたします。

(編集担当・大野修一)

ISBN4-19-861383-4

takaharu sakurai

櫻井武晴

シグナル

徳間書店

第1章	暴走の瞬間	7
第2章	ありえない屍体	35
第3章	先行捜査	53
第4章	イタズラ電話	73
第5章	脳溶解連続殺人事件	86
第6章	電子レンジ殺人	114
第7章	携帯電話	143
第8章	キツツキ	165
第9章	失われた過去	187
第10章	切り札	207
第11章	青函連絡船沈没事故	226

contents

illustration : taisuke hinata

design : mugen kanzaki

signal

第12章	記憶	256
第13章	1977~1978	293
第14章	約束	335
ENDING.....		371
あとがき		379

空は晴れ渡り、澄み切っていた。

緑あざやかな芝生が、かげろうを立ち上らせている。風がないため、周囲に緑が匂いたつ。よく刈り整えられた芝生は、ほかに花木などがないため、まばゆい緑のじゅうたんと化している。

不意にその芝生に小さな影が射した。

黒い影はゆつくりときこちなく、緑の上を移動していく。しばらくの間、それはたどたどしい軌跡を描き、家屋が作り出した鋭角な暗闇に入って初めて、猫としての輪郭を現した。

真つ黒に見えた体毛は、どちらかといえばグレーがかっており、黒い光を放つべき瞳は、うつすらと白くにごっていた。その小さな体軀は時折、不器用に芝生にこすりつけられている。

そんなふうに歩き方が不格好なのは、芝生が熱いせいではない。後ろ脚が一本足りないせいだ。ひざ辺りから失われたそれは、黒々とした血液を滴らせている。

それでも猫は鳴かなかった。立ち止まれば死んでしまう、そんな切実さを背負って、半身を引きずりながら歩を進めていた。

突然、二人の男の子が猫の視界に飛び込んだ。彼らはまるで双子のように同じ服を着て、同じように髪を短く切りそろえている。年の頃はともに七、八歳くらいだろうか。子供たちは熱

されたかげろうを踏みしめながら、笑顔で近づいてきた。

だが、彼らが優しく手招きしても、愛しく見つめても、猫は二人に近づき、愛敬をふりまくことはなかった。

不意に男の子たちは笑い出した。その甲高い声は、三本脚で歩き続ける猫に向けられている。どこまでも明るいその笑い声にせき立てられるように、猫はぎこちなく、しかし切迫した様子で歩を進めた。そこに子供たちの笑い声が、容赦なく追いかけた。

とうとう猫はその場に身を倒した。白くよんだ瞳にまだ動きがあつたが、体は横たえたまま、腹部を軽く上下させるだけだった。

そんな中、また別の小さな影が、光り輝く芝生に侵入した。その影の脚も三本だった。美しく刈り整えられた緑を這い進むその影は、黒茶まだらの猫だった。

男の子たちの笑い声は一段と甲高くなった。彼らの指さした先に、さらに三匹目、四匹目の猫が躍り出る。それらは例外なく、脚が一本足りなかった。その姿に男の子たちは笑い転げ、終いには抱き合って狂喜した。

先ほど倒れた猫の眼は濁り、既に何も映していなかった。横たわった体もだらしなく伸び切っていた。ただ、どこかでキツツキがくちばしを木の幹に叩きつける音だけが、その耳にいつまでも響いていた。

第1章 暴走の瞬間

とうとう寝過ごした。

ハンドルを握る手に力がこもる。

飯村景は、ため息とともに何度目かの後悔をした。

車窓に流れる光景が、スローモーションじみて見える。信号に遮られる確率まで、いつもより高い気がした。

最近になって陥った不眠症が、苛立ちに拍車をかける。三十歳を迎えてから、寝不足や徹夜が応えるようになった。

すべては毎晩かかってくるイタズラ電話のせいだった。

枕もとに置いた携帯電話が、やっと眠りについたちやうどその時を見計らったように、けたたましく鳴り響く。そして電話に出れば、決まってそこから、硬く乾いた音が小刻みに聞こえるのだ。

携帯電話の電源を切ろうにも、景は仕事柄それが禁じられていた。イタズラ電話の主は、そのことに気づいているのかもしれない。しかも不思議なことに、その電話は携帯電話の受信記録に残らなかった。番号表示されないのはもちろん、『非通知』とさえ残らないのだ。

車内に立てかけてある携帯電話に目をやると、液晶画面の時計が朝の八時を示している。その時また、車の進行が赤信号に遮られた。景は思わず何度目かのため息をついた。

今日は所属する『二号調べ室』の在庁番初日だった。下っぱ巡查部長が遅刻するわけにはいけない。これからしばらくの間、事件の第一報が飛び込む警視庁の刑事部屋に、同じ班の十人と詰めなければならぬのだ。

不意に携帯電話がけたたましく鳴った。液晶表示に目をやると、『科捜研・物理』と表示しながら光っている。景はイヤホンマイクを装着した。

「運転中なんだけど」

電話に出るなり、相手も確認せず、そう告げた。科学捜査研究所の物理科から、この携帯電話にかけてくる相手は決まっている。

「家に帰るとこ？」

呑気な声はやはり佐々薫ささかおるだった。

刑事の仕事はそのサイクルが極端に不規則なため、それをよく知る人物が朝っぱらからこんな質問をしてくるのは仕方がない。

「在庁初日。今、本部に向かつてる」

「じゃあ出勤途中？」

「切るよ」

「今夜、家で待ってるから。事件が入らなかつたら来て」

言い終わると、薫の方から電話は切れた。デートの誘いのはずなのに、事務連絡を受けたような感覚しか残らない。景は彼女のそういうところが好きだったが、会話の調子を合わせてくれているだけかもしれないなかった。

イヤホンマイクを取り、フロントガラスに目を移した。さつきまではのんびりでも走り続けていた先行車が、今は少し走っては止まりを繰り返している。

遅刻だと思った。

景は八つ当たりするように、カーラジオのスイッチを叩いた。

「内堀交差点で三台の乗用車が信号待ちの最中に急発進し、それぞれ前の車に衝突。計六台の運転手はいずれも重傷で……」

『内堀交差点』で派手な玉突き事故があったようだ。そこはこれから向かう警視庁本部の近くであり、通い慣れた道でもあった。

「同じ時刻、現場近くでは、数カ所でパソコンやエアコンの誤作動が発生したため、警視庁では車両衝突事故との関連を……」

霞が関の警視庁本部庁舎ビルに着き、地下一階の車庫に車を滑り込ませると、既に五分の遅刻だった。景は舌打ちをして、乱暴に車のドアを閉めると、エレベーターに走った。

地下三階車庫にとまったまま、なかなか昇ってこないエレベーターに苛ついた。

その時、景は背後で忙しなく警察車両がうごめいているのに気づいた。見ると、交通機動隊のパトカ

ーが次々に帰着していた。

エレベーターの隣にある配車事務室に目をやると、衝突したまま黒煙を上げている車が、不安定なアングルでテレビに映し出されていた。

先ほど車の中で聞いたニュースが、景の脳裏に蘇^{よみがえ}った。放映されているのは『内堀交差点』に違いなかった。どうやら背後のパトカーは、玉突き事故の初動捜査を終えて帰ってきたものらしい。

やっと扉が開いたエレベーターに乗り込むと、先客の女が景の顔を見るなり六階を押した。彼女の顔に見覚えはあったが、記憶が定まらない。

最近、景は自分の記憶力に自信が持てなかった。

確かに覚えたはずの車のナンバーが思い出せなかったり、メモしたはずの地取り情報が記録されていなかったりといった失敗が続いていた。多分、連夜の不眠が影響しているに違いない。イタズラ電話の主を特定することが急務だと思われた。

捜査三課と国際捜査課がおさまっている五階の刑事部フロアで、エレベーターに同乗していた女が降りた。景はそこでやっと、彼女が共済診療所の事務員であることを思い出した。

六階の刑事部フロアに到着すると、景は扉が完全に開く前に飛び出した。

所属する捜査一課へ行くまでに、このフロアでは何人もの厳^{いひか}つい男たちと擦れ違い、挨拶を投げなければならぬ。ここには暴力団や総会屋などによる暴行、恐喝、賭博などを取り締まる捜査四課と暴力団対策課もあるので、どちらが暴力団員だか分からない風体の刑事たちが早足で行き来している。細身の景は、彼らの中で明らかに浮いていた。

捜査第一課『強行犯捜査係』の扉をくぐった。ここは殺人、傷害など人の生命身体に関わる犯罪を扱
い、一係から十係に分かれ、他に二係の別班と特設現場資料班がある。

いつものように一係の『二号調べ室』に入ると、同じ班の一同から「遅い」の一言で迎えられた。そ
の後に続いた言葉は、有無を言わさぬ大前田主任おおまえだの命令だった。

「すぐ日比谷署へ行け。捜査会議は九時。それまで適当に調べてろ。以上」

五十歳になるこの警部は、いつも最低限のことしか言わない。ノンキャリアで本部の主任捜査官にま
で上ったことを、誇りに思っているのだろう。体重百キロの体軀にその矜持きようじがにじみ出ている。何事にも
懸命で、行動の正誤に立ち止まってなやまず、「考える前に動け」が口癖の上司であり、景が苦手な
相手の一人だった。軍隊などという例を持ち出すまでもなく、一見威勢のいい彼らこそが、世間の常識
や組織の前例といったものに最も弱い人種であることを景は知っていた。

部屋に詰めているはずの早川はやかわの姿が見えなかった。早川巡査は大前田班刑事の中では一番年下という
だけで、誰からも便利に使われていた。おそらく一足先に日比谷署へ向かわされたのだろう。

早川と景の若年二人が派遣されるということは、日比谷署で待っているのは本部主導の大事件ではな
く、所轄署主導の応援捜査に違いなかった。

先ほどテレビで放送されていた玉突き事故が、景の頭をよぎった。『内堀交差点』は日比谷署の管轄
で、事故捜査の主導は日比谷署交通課だ。つまり、同じ署の刑事課が応援に呼ばれ、景たちはさらにま
たそこから応援に呼ばれたということだろう。確か衝突事故車両は計六台。人手が欲しいと思うのも無
理はない。数秒で頭の中が勝手に事情を整理した。

とりあえず日比谷署へ向かおうと、景はたった今入ってきたドアに手を掛けた。その途端、主任補の古芝^{こしば}に名前を呼ばれた。

「飯村君。ちよつと」

古芝は常に間が悪い男だった。彼は「ちよつと」と言いながら、いつもターゲットを会議室に連れ込もうとする。景はそれを避けるため、ドア近くに立ち止まったまま、動かずに振り向いた。

「君はクレバーな男だから、応援捜査だつて予想くらいいついていると思うけど、実は今朝、日比谷署の管轄道路で玉突き事故が起きてね、だからその応援ね。あ、早川君には先に行ってもらった。ま、変な言い方だけど専門外の応援だから、飯村君たちは。でも気を抜かずにしつかりな。あそこの交通課の課長は、僕のことよく知ってるから、何かあったら僕の名前を出して彼に——」

延々と話し続けるこの男はいったい何が言いたいのだろう。景は古芝の話を聞く時は、頭の十分を真面目に聞かないことにしていた。結論がいつも十分後だからだ。その結論も至って無難で、新しい情報盛り込まれていることすら少ない。にもかかわらず、わざわざ人を会議室に呼び出して話をしたがる。景にとって大前田以上に苦手な人物だった。

「分かりました、日比谷署の交通課長によりしく伝えときます」
勝手に古芝の話を切り上げ、景は刑事部屋をあとにした。

「同じ時間、同じ場所で、突然暴走した車両は三台ありました」
日比谷署の交通課捜査員は報告を終えて着席した。

『内堀交差点玉突き事故』は、三台の加害車両の急発進による衝突事故だった。通常ならばドライバーの運転ミスが疑われたが、何の繋がりもない三人のドライバーが、一斉に暴走するとは考えられなかった。

「では次。現場車両鑑定。科学捜査研究所、物理科機械係」

古芝が旧知の仲だと言っていた交通課課長が、捜査会議を進行させた。その彼の声に姿勢よく立ち上がったのは、白衣姿の佐々薫だった。彼女は振り向いて景を一瞥すると、メモや資料を見ることなく、女性には珍しいよく通るアルトで歌うように報告を始めた。

「急発進して暴走した車両は、全てオートマチック車でした」

暴走車両に機械的欠陥はなかった。それが薫の鑑定結果だった。

これまでの捜査員の報告によれば、事故発生時、現場近くの民家でパソコンやエアコンの誤作動が頻発し、マンシヨンのオートロックが一斉に外れるというアクシデントがあったことが分かっていた。これと薫の鑑定結果が相関して、答えはおのずと浮かび上がった。

「以上のことから、事故原因は高電圧の電磁波が、現場周辺に一時的に流れたことにより、オートマチック車の電子機器が誤作動を起こし、暴走したものだと思われます」

電磁波干渉だと考えれば、マニュアル車ではなくオートマチック車だけに誤作動が起きたことや、信号機にまで異常が起きたことが説明できた。

この結論に、会議室にいる数十名の捜査員のうち、何人かが薫に質問を投げかけた。

「つまり、カーラジオとか違法無線を積んだ車が、現場を走ったということですか」

「だったらその車両も事故に巻き込まれてるはずじゃないか」

「ちよつとちよつと、だいたいそんなことくらいでオートマ車が誤作動するんですか」

「そうですよ、それが近隣の住宅にまで影響するなんて」

最前列に座る首脳陣以外が出した結論は、捜査員たちによつてつぶされる。それが捜査会議だ。捜査に正確を期すためには、この手の作用も必要だった。だが、景はそこに仕事に対する誠意だけでなく、悪意の感情が入り交じっているのを時々感じていた。

そんな彼らの質問に、薫は一言で答えた。

「電磁波の干渉は、『時』『場所』『規模』を選びません」

これは、薫が原因不明の火事場鑑定をする度に、いつも肝に銘じることだった。

留守宅で灯油を使った電気ストーブが発火し、全焼した現場の鑑定をした時もそうだった。薫がストーブの欠陥を疑い、鑑定を進めていくうちに浮かび上がったのが、電磁波干渉だった。全焼家屋が道路に面していることに目をつけた彼女は、家屋の燃焼具合からストーブのスイッチが入った時刻を割り出し、その時に家屋前の道路を走行した可能性のある車数台にあたりをつけた。それらの車に搭載されていたラジオやコンポ、カーナビゲーションなどの電子機器を、一つ一つしらみ潰しに実地テストしたところ、タクシーの業務無線が、問題のストーブのスイッチを入れた。タクシー会社を確認したところ、あるタクシーが全焼家屋の前を通った時間に、ちよつど無線が入電していたことが分かった。特定のストーブのスイッチと同調する車両無線が、たまたまそのストーブの近くで着信した。このわずかな確率が、一軒の家を全焼させる悲劇となったのだ。